

ケンブリッジ州ウィリಂಗム教区における親族構造 とその社会経済的背景…一五〇一年—一七三〇年

高橋 基泰

近年の英国社会経済史なかならず地域史の分野で次第に用いられることの増えてきた遺言書を年度順にかぞえてみると、人口変動、特に死亡率にほぼ歩調を合わせる上、一五五〇年代後半イングリランド全土を襲ったインフルエンザの猛威の程をも示す。

イングリランド東部ケンブリッジ州に属し、沼沢地縁りに位置するウィリಂಗムもインフルエンザ期、多くの人々を失う。とりわけ老人の犠牲者は多く、共同体の歴史に関する記憶を担う古老を多く失ったかと思われる。一方、遺言者の半数は、未成年の子供を残すか、或いは未婚であった。つまり概して若い人々であり、我々の遺言書に関して抱く通念—遺言者とは比較的裕福な老人—とは異なる。しかし、この時期はそうした通念が確立する以前の状態にあったらしい。インフルエンザ期の衝撃の余波は人々の遺言書作成に対する態度を徐々に変えさせ、変化は一七世紀に入っても続く。更に、一六世紀後半の時期、「未だ生まれざる子供」、つまり胎児についての言及が増えるが、一七世紀になると減る。

このように、全国的な変動のさ中、一六世紀後半期のウィリಂಗムは、独自の対応をし、老年層から胎児に至るまで「親族」「家族」関係の中に新たな意味を実質として見出していったようだ。一六世紀後半には開放耕地にもとづく共同耕作のかたちをとらない農業経営が次第に普及をみせ、大局的には、北西ヨーロッパを中心にして世界全体が、資本主義経済の展開とともに大きな変動を示す。激動の中、当教区において人々の態度の変化が、農業生産のあり方、生産組織の枠組みに即して明確となるのが相続慣行と親族関係との二つの局面であった。なかでも遺言書の作成は、相続慣行の一部を形成するが、他方、共同体の記憶の固有化の技法でもある。その普及には教会の指導の影響もあるが、共同体内での日々の意志伝達、土地配分、共働作業及び教育活動等に支えられた自発性を基礎としよう。

また、他のイングリランドの教区で見られるような社会経済階層における分極化の代わりに、教区全体としてウィリಂಗムは貧困化する点特徴的だが、これは親族関係のあり方にも反映する。租税記録・耕地保有台帳等を用い、横断的に親族関係を捉えていくと、親族関係の収縮・拡大が一六〇三年の拡大期をピークに展開される。その集中・拡散は、ウィリಂಗムそれ自体の、より広域な社会の動きへの対応と連動する。また、学校教育への関心も伴ったが、それもウィリಂಗムが共同体として一つにまとまっていたからだろう。結果的に、協力し合う親族集団が、共同体の核として貧しくなりながらも少なくともその地において家系を続けるのである。

(東北大学)